

国家と女学生

—東京女子高等師範学校を事例として—

菅 聡子

はじめに

一八七五（明治八）年、日本最初の〈官立〉女子教育機関として、東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）は設立された。「東京女子師範学校教則」（一八七五）第一条に「女子師範学校ハ育幼ノ責ニ任スル者ヲ養成スル所ナリ」と定められているように、同校は、女性教員養成機関としての存在意義をまず備えている。このことは、明治日本が近代国民国家として自己形成していくにあたり、急務とされたのが国民教育の確立であり、それに際して、次代の小国民の教育を担う役割が女性に付されたことをまずは明確にしている。

同時に、東京女子師範学校は、一八八五（明治一八）年に東京師範学校に合併され東京師範学校女子部となり、さらに翌年の師範学校令により東京師範学校が高等師範学校に格上げされたのともなって、同校も高等師範学校女子部に昇格し、さらに一八九〇（明治二三）年に女子高等師範学校として独立する過程において、単なる教員養成機関としての位置をこえて、学問に志を持つ女性たちが全国から集う、女性のための唯一の最高学府²⁾となった。

〈学問〉する女性としての女学生³⁾の表象をめぐる研究は、一九九〇年代以

降、年々充実と発展をみせているが、とくに東京女子高等師範学校の女学生たちをめぐって、同校が〈官立〉であったことの意味が真に考察されたことはない。この点について、早くに問題意識を示したのは、本田和子『女学生の系譜―彩色される明治』（青土社、一九九〇）である。鹿鳴館時代、カーテンで作った夜会服に身を包み、ベチコートは即席の新聞紙製、お茶の水の寄宿舎から鹿鳴館までの道を歩いて舞踏会に駆り出される女子師範生たちについて、それが、当時、徐々に取り沙汰され始めた女子教育無用論に対するひとつの応答であったことを本田氏は指摘している。すなわち、「鹿鳴館舞踏会が国家的必要事なら、それに奉仕すべく呼び出された自分たちは、国家有用の人材」である、「政府による欧化実現の姿」を自分達が証しだてよう、という「健気な奉公の表現」であったのだ、と⁴⁾。

しかしいま、あらためて問われねばならないのは、近代日本において「国家有用の人材」とはすなわち何を意味したのか、ということである。

東京女子高等師範学校の生徒たちは、明治の〈学問〉する女性として、女性の教育に対する種々の攻撃と闘わねばならなかった⁵⁾。その苦闘と高い志は現在の私たちの想像を絶するものがある。だが一方で、近代日本における師範制度の頂点に位置づけられた東京女子高等師範学校が、〈官立〉ゆえに「教育勅語」の遵守をはじめとする国家との連携に与せねばならなかったことも事実である⁶⁾。

東京女子高等師範学校と国家との連関を考察することは、明治日本にお

いて、教育をキータームとした女性の国民化がいかなされたか、その様相の一端を明らかにすることになるだろう。本稿では、その前提として、明治天皇皇后美子（昭憲皇太后）、教育勅語、そして日清戦争の三点と東京女子高等師範学校との関連を見る。これらの論点は、同校が〈官立〉であることの意味を、端的に示すものであると考えられるからである。

なお、本稿では、他校との混同をさけるために、原則として東京女子高等師範学校の名称を用いる（東京女高師と略記）。さらに、前述したように、名称は年代によって変化しているが、同様の理由によって統一する。また、必要に応じて元号ならびに「下賜」等の皇室用語を用いる。

一、「皇后様の女子カレッジ」^⑦

一九一五（大正四）年、開校四十周年記念式典挙行に際し、東京女子高等師範学校には「明治記念室」が新設された。「昭憲皇太后の御下賜品・御遺物等の保管並びに明治時代に於ける我が国文化の変遷・發達を記念すべき物品を陳列する」ことがその目的である。^⑧

明治記念室は校舎二階の広やかな一室の壁面を修飾して、正面には神々しい神殿をしつらへ、戸張の奥に明治天皇・昭憲皇太后両陛下の御真影を奉安し、其の前方には昭憲皇太后陛下が本校へ行啓の都度、下賜された御品を陳列し、他の三方の壁面には明治年間の功臣の肖像を特に画かして掲げ、其の間には明治年間に於ける我が国領土擴張の地図の順次に展開したものを掲げ、室内は凡て明治時代を記念すべき歴史上の事物を以て満たされたのである。

（東京女子高等師範学校『東京女子高等師範学校六十年史』一九三四、一三四頁）

明治天皇・昭憲皇太后の御真影を「神殿」に安置し、その両者が統べる空間のなかに、本校への下賜品、「明治年間の功臣の肖像」、そして「我が国領土擴張の地図」を配置したこの「明治記念室」は、まさに明治という国家のなかの同校の位置とアイデンティティの自認を示すものである。「領土擴張」が象徴する明治国家の繁栄の一端に、同校が寄与し、また含まれていることをこの配置は語っている。そして、同校が「誇り」とした「開学以来の皇室との深い関わり」が直接的には明治天皇皇后美子とのそれであることは言うまでもない。^⑨

一八七七（明治一〇）年四月、クララ・ホイットニーはその日記に「母に皇后様の女子カレッジの勤め口の話があつたが、それは、今まで外国の婦人は勤めたことのない所である」と記した。「皇后様の女子カレッジ」とは当時の女子師範学校のことである。^⑩

外国人女性にこのような印象を与えるほどに、美子皇后は、たびたび東京女高師を訪れた。その行啓回数は、開校式から一九一二（明治四五年）六月三日の最後の行啓まで十二回を数える。これは、華族女学校に次ぐ行啓回数である。一八七五（明治八）年の同校の開校にあたり、美子皇后は「御内庫金五千円」を下賜し、さらに「女学ハ幼稚教育ノ基礎ニシテ忽略ニスヘカラサルモノナリ聞ク頃者女子師範学校設立ノ拳アリト我甚タ是ヲ悦ビ内庫金五千圓ヲ下賜セン」との「令旨」を与えた。^⑪この言葉は、そのまま「東京女子師範学校教則」第一条と照応し、また女子教育の正当な根拠として「幼稚教育ノ基礎」であることをあげる点は、初代女子師範料理・中村正直や初代文部大臣・森有礼ほか、明治期に女子教育に携わったすべての人々に共通する、国家安寧の根本は教育に存し、国民教育の基礎を担うのは母である、とする見解と一致している。^⑫

また、開校の翌年、一八七六（明治九）年には、美子皇后は東京女高師

に「みがかずば玉もかがみもなにかせん学びの道もかくこそありけれ」の和歌を下賜し、七八年より同校の校歌として現在にいたるまで歌われている。¹⁴この和歌は、七五年に皇后が「フランクリンの十二徳」を詠んだうち、「勤労」を詠んだ「磨かずば玉もひかりはいでざらむ人の心もかくぞあるべき」と同趣であり、また一八八六（明治一九）年、華族女学校に下賜され、のちに女学校唱歌として愛唱されることになる「金剛石」の原型でもある。

学問を奨励し、切磋琢磨を要求するこの歌は、同時に、女性たちが本来「玉やかがみ」であることを前提としている。すなわち、女性たちが可能性と能力を潜在させた存在であることを確信し、そのうえでの切磋琢磨を呼びかけているのである。「理知の人、意志の人であり、明治という時代を颯爽と駆け抜けた人」¹⁵、「女性の国民化の理想的モデル、生きた模範としてうるわしく立ち現れてきた」¹⁶皇后美子その人が、女性の可能性への信頼をかくも平明に歌ってみせたとき、学を志して全国から集まっていた東京女高師の生徒たちが深い感銘を受けたであろうことは、想像に難くない。この歌への応答でもあるかのように、東京女高師生たちは、忠実に「女性の国民化の理想的モデル」としての皇后の行為を模倣し、「国民」としての自己形成をとげていくのである。

その一例として、一八九二・九三の両年に行われた「養蚕・製糸」の体験授業をあげることができよう。『東京女子高等師範学校六十年史』によれば、「此は本校並びに附属校園の生徒・幼児に実業に関する知識を与へ、兼ねて実業の思想を養ひ、又養蚕・製糸に関する標本を製作させる為」¹⁷であった。「寄宿舎内二飯二蚕室ヲ設ケ蚕児ヲ飼養シ全校ノ生徒ニ其發育ノ模様ヲ目撃セシメ」、さらに著名な養蚕家を招き、「養蚕ニ関スル講話」を行った。¹⁸

若桑みどり『皇后の肖像』（筑摩書房、二〇〇一）は、皇后が関わった

国家的な事業の領域として、女子教育、看護（とくに戦時看護活動）、織布製糸産業育成奨励の三点をあげ、さらに皇室の女性と養蚕の関わりについて、次のように述べている。

養蚕奨励は美子皇后に継承され、歴代皇后が継承した。養蚕、製糸、紡績など、布と衣服に関する興業奨励は皇后の所管となった。西欧においても、中国においても（中略）、古代以降、織りと紡ぎは女性的美徳の象徴であり、女王・王妃によって奨励される主要な産業であった。
（『皇后の肖像』二五七頁）

東京女子高等師範学校における「養蚕・製糸」の学習は、この美子皇后の行いの模倣であることは言うまでもない。さらに、皇后は一八七三（明治六）年、早くも富岡製糸工場に行啓を行っているが、東京女高師での体験学習においても、「簇の前後数日間は工女一人を雇つて助手とした」¹⁹。「養蚕・製糸」は、伝統的な女性的美徳と近代的殖産興業への関与を融合させた、明治近代における女性のジェンダー・ロールの典型であり、それは皇后美子から東京女高師生へと教授されたのである。²⁰

ところで、東京女子高等師範学校における教育のあり方については、その〈官立〉ゆえの側面がしばしば批判的言説の対象となっている。たとえば、宮川保全は、共立女子職業学校創立記念式の講演で、同校創立の動機が、かつて勤務していた東京女子師範学校の「官立学校」であるがゆえの問題にあったことを述べている。すなわち、明治九年当時、中村敬宇（正直）摂理時代には、「教科目の主要なものは、漢文と漢文体の仮名交り文」で、「生徒の服装は男子用の縞の十番緋を着し、髪は銀杏返し」であった。しかし明治十三年に福羽美静が摂理になると、「教科目を改めて和文を必須科目」とし、「生徒は袴も用いず、髪は自由に任せて、島田も

ある、銀杏返しもあるという有様」であった。さらに明治十七年、那珂通世が校長となり、翌年森有礼が文部大臣となると、「英語を必須科目とするやら、生徒に洋服を着せるやら、束髪に結わせるやら、全然面目を一新する程の改革が実行された」。そして、以下のようにまとめている。

これを通観致しますと、東京女子師範学校は僅々十年の間に、学校の教科も、生徒の風俗も、漢、和、洋の三変化を致して居り、従つてその十年間の卒業生は、区々異様の教養を以て社会へ出たという次第でございます。斯様な訳で、官立学校はその長官の代る毎に主義主張を変更し、生徒は全くその方向に迷うの感がございました。

（高瀬壯太郎編『共立女子学園七十年史』共立女子学園、一九五六、一五一―一六頁）

だが、この「三変化」に翻弄された同校の教育方針が、ある一つの方向に限定されるときが訪れた。以後の「国民教育および国民道德の基本」となる「教育二関スル勅語」（以下、「教育勅語」と表記）の発布である。次章では、この「教育勅語」に対する東京女子高等師範学校の応答を見てみたい。

二、「教育勅語」と東京女子高等師範学校

東京女子高等師範学校の生徒たちは、「国家有用の人材」たるべく、何よりも国家の期待する女性教員として自己形成せねばならなかった。その指標となったのが、「教育勅語」である。一八九〇（明治二三）年十二月二十五日、東京女高師に下賜された「御親署」のある「教育勅語」は、「菊御紋付黒漆塗緑色真田紐付の箱に納めたまま拝受」したものを、さら

に「桐白木製の外箱に納め錠を卸して土蔵内金庫に安置」し、その鍵は学校長自らが保管した。なお、奉読用には別に「巻物の謄本」を作製した。また、翌一八九一（明治二四）年二月には、「学校長は教官・監事・舎監・書記の新たに就職した時、及び本校（引用者注・本校及）附属高等女学校生徒の卒業した時、御親署の勅語を奉拝させることに定めた」。

この「教育勅語」への直接の応答は、まず、毎年の卒業式における卒業生謝辞にあらわれる。「教育勅語」発布前の謝辞では、「女子のために此学校をまうけさせ給」うたことへの感謝や、「卒業ののちハ都鄙をいはず近き遠きをとハずあがたへの学校にもゆきいたりてそのところへのをとめらの師となりて広く教を施させ給ふこと、しもなりぬるなん」との決意が「御代の恵」への感謝とともに語られていた。²³しかし、発布以後の謝辞には、「たゆまずうます誠と忍耐との船にのり勅語のみこゝろをかちとし」

「今より後はひたすら勅語の御主意を奉戴しあまたの障碍にたへて教育のわざに身をなげうちあはせて女子のみちをつくし申すべし」²⁵「今よりは後ハかしこき勅語の御主意をかしらに戴きなき年月懇にをしへたまひし学ひの業はたまさとしの旨を心にと、め身にしめて」²⁶といったように、必ず「教育勅語」への忠誠を誓う言葉が含まれるようになる。²⁷

加えて、一八九四（明治二七）年六月十一日に制定された「東京女子高等師範学校教育要旨」の冒頭は、「本校ハ女子教育ノ淵源ニシテ風教化育ノ依テ生スル所ナレハ殊ニ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体シテ其ノ実効ヲ挙ケンコトヲ務ムヘシ乾坤徳ヲ異ニシ陰陽行ヲ同シクセス本校ノ教育ハ一ニ女子ノ性ニ順ヒテ之ヲ施スヘシ」²⁸と始められている。ここにおいて、東京女子高等師範学校における教育の方向性は、明白に「教育勅語」のそれを受けたものとして一元化されたと言えるだろう。そして、女高師生たちにとっては、この勅語への忠誠はやはり、美子皇后とのつながりにおいてより具体的に意識されていたように思われる。

美子皇后の誕生日、五月二十八日は「われら国民が、母とも母とあふぎまつる皇后宮の御誕辰²⁹」として、とくに女学校を中心に祝いの儀式がもたれていた。東京女高師でも例年授業を休み「講堂に於て天長節同様の祝賀式³⁰」を行っている。この「御誕辰」のみならず、行啓など機会あるごとに、東京女高師では生徒に向けて「皇后宮陛下の御美德」を伝える校長講話がなされ、「一同謹聴して感涙にむせびあへり³¹」と伝えられている。

たとえば、一八九二（明治二五）年四月二十五日の皇后行啓に際して行われた、校長・細川潤次郎の講話「女子之忠」では、「本題ニ説キ入ルノ前生徒諸氏ニ一言ス可キコトアリ」としてまず「皇后宮陛下本校ニ行啓シ給フノ沿革」について語り始めている。

蓋我陛下ノ一視同仁ニ御盛徳ニ由リ海内ハ一家ノ如ク人民ハ赤子ノ如ク思召シ給フニモ拘ハラス此学校ニ特ニ御眷顧ヲ垂レ給フコトハ蓋本校ハ我国女子教育ノ淵源ナルヲ以テ特ニ之ヲ重シ給フ故ニハ非サルカト推察シ奉ル次第ナリ

〔女子之忠〕『東京茗溪会雑誌』一一二号、一八九二・五・二〇、一八頁）

「女子教育ノ淵源」であるがゆえに、美子皇后から特別の思いをかけられている、との自覚は、東京女高師生たちにとって、自らの学問の志の拠り所ともなったに違いない。細川は、「陛下ノ厚ク女子教育ニ御聖慮ヲ注セラレ給フコト本校ノ為メニ冥加至極有リ難キコトナリトス此思召ニ対シ奉リテモ生徒諸氏ハ兼テ拝承セル勅語ノ旨趣ヲ挙々服膺シ学ヲ励ミ行ヲ磨キ聖恩ノ万一二奉答スル所以ヲ思ハサル可カラサルコト思考ス」とその前置き部分を締めくくっている。皇后の思し召しも、最終的には「教育勅語」に収斂する。このような構造の講話を通して、女高師生たちは、「教

育勅語」と美子皇后の女子教育奨励の志を直接結び付けながら受容していったと思われる。

たとえば、のちに十文字学園を創立する十文字ことは、「教育勅語」発布後間もない一八九一（明治二四）年三月の日記に、友人たちに言及しながら「道徳・学力ともに進めて、国のために尽さんとの志みちみたる人たちなれば、先の方針をはかり、前の不善を誠むるため、善をすすむ悪をこらすといふ主意にて、月に二度会を開き、互に善をすすむ悪しきを諫め合ふこととなりぬ。まことにうれしきことといふべし³²」と記している。自らの使命を胸に、素直な、それだけに一途な「国家有用の人材」への希求が示されている³³。

そして、かつての鹿鳴館時代、国家の西洋化推進主義に奉仕すべく、着なれぬドレスに身を包んだのとは全く異なる方法で、彼女たち東京女高師生たちが「国家有用の人材」であることを示す時がきた。明治日本にとつての最初の対外戦争、日清戦争の開戦である。

三、「国民」たることの証

一八九四（明治二七）年、日清戦争開戦にあたり、人々は戦時における「皇后の独自の公的役割」、すなわち戦時看護に携わる美子皇后の姿を見た³⁴。ひとつは負傷兵のための「包帯作り」であり、ひとつは度重なる予備病院への行啓である。

皇后が初めて負傷兵のために「包帯作り」を行ったのは、一八七七（明治一〇）年の西南戦争時である。「以来、戦時に「包帯作り」をすることは日本の皇后の伝統になった³⁵」。日清戦争時には、「手製の包帯や防寒用真綿などを、日本赤十字社より戦傷者や出征軍人に頻繁に下賜³⁶」した。「包帯に用いた真綿は大婚二十五年のさいの献上品³⁶」であったという。

日清戦争時の美子皇后の行動は、雑誌・新聞記事を通じて国民全体に伝えられた。そして、「皇后宮には、海陸軍負傷者をあはれに思召され、親く繻帯を製し給ひ、広島なる野戦衛生長官の許まで下し賜はりしと承りぬ。斯かる深き御恵を蒙るものは、孰も、感泣に堪へざるものなりしとぞ」といった記事に導かれ、皇后にならって一般の女性たちも包帯等の製作に精を出した。また、新聞も「深閨の女子」に対して、皇后にならって「我が軍需品の第一たる綿繻糸の類」を作るよう呼びかけている。「皇族の御息所を始、貴夫人方」が、「陸軍恤兵部へ、消毒繻帯一万二千本を寄贈することに定め」、「日々、十人又は二十人づゝ、更代る赤十字病院の消毒室に出て、普通の看護婦同様の消毒服を着けられて、熱心に、之に従事せらる」という状況は、その一端を示すものであろう。

もちろん、東京女子高等師範学校の生徒たちもこの動きに応じた。当時の舎監・山川二葉ら五名が「同志の婦人を募りて、防寒の具を製して、遠征将士の労を慰めん」と、募集の書状を各雑誌に送った。『教育時論』三四四号（一八九四・一一・五）は、「女子教育家の義金募集」（三七頁）として「山川二葉女史など女子高等師範学校の女教育家が奮起して、出征軍人へ防寒具寄贈の爲め、金員を募集しつゝ、ありしが、其金一千七百圓に達したる由なれば、近々戦地に送付するの目的を以て、目下自ら防寒具の製造に従事中の由なるが、弊社にては大に其拳を賛し、之に関する刷物を教育時論に夾さみ、且つ之を夾みたる時論五百部丈を寄贈することになせり」と応じている。その結果「金貳千〇五拾参圓八拾三錢五厘」の「応募金惣高」となり、この資金によって「真綿百七十一貫九百四十目」「靴下五十五ダース」等を購入し、海軍恤兵部へ納めた。「因に云ふ斯く多数の金員の集まりしは、各府県に散在せる女子高等師範学校卒業生の尽力最も多きに居ると云ふ」。

また、東京女高師生たちは、負傷兵の慰問にも訪れている。

女子高等師範学校教諭武村千佐子ぬし、山川二葉ぬしたちは、去にし十二日、同校生徒百五十名ばかりを引きつれて、予備病院を見舞ひ、各病室を廻訪して、患者につき、ねもごろに、戦争当時のありさまを問ひなどしては、ふかく、こを慰め、ことに、狂言、手品、音曲など、それ／＼の人を雇ひ、おの／＼わざを演ぜしめて、大に、負傷患者を慰めたりとぞ。煎餅千八百五十人前と、扇子千八百五十本とを寄贈したりといふ。

〔雑報女子高等師範学校の見舞〕『女鑑』八六号、一八九五・五・二〇、六八頁

これに先立つ三月二十二日から数日間、美子皇后は広島の子備病院を訪れ、負傷兵を見舞っている。「患者の枕辺に立たせ給ひて、一人毎に委しく病状を聞きし召され」、「此後尚篤と加養せよ」「起くるに及ばず大事にせよ」と言葉をかけたという。報告者の野戦衛生長官・石黒忠恵は「此勿体なき御詞を承りて、患者一同感涙に咽びしのみならず。我々は勿論御後に随へる人々まで覚え涙を浮べたり」と記している。またこのとき、皇后は「清兵負傷者」の病室をも訪れている。「敵ながらも負傷の有様を憫然に思召され」しばらく立ち止まったので、意を察した随身が、通訳を通じて「一同大切に療養せよ」と伝えると、「敵の負傷者一同皇后陛下の方に向ひ合掌し、涙を流して感戴」した。まさに赤十字精神を体現して見せていると言える。

野戦衛生長官・石黒忠恵の妻久賀子が、自分宛の手紙を誌上公開したという体裁のこの記事は、全編「涙」に彩られている。自国の負傷兵に加え、敵国の負傷兵、さらに軍夫らの病室を見舞い、慰撫の言葉をかけ、自らも「御涙を浮ばせ給ふ」。その皇后の慈愛に、当の負傷兵たちも「余」も随行

者たちも、「一同声を吞みて只感泣の外」はない。実は、皇后の「御涙」の内実は示されていないのだが、そのような説明はもはや必要とされない。「涙」という感傷の伝播により、人々は暗黙の了解のうちに感情を共有する。そして言うまでもなく、この記事を読んだ読者にもこの「涙」は共有されただろう。そして平時ならば考えられないこの病床への行啓は、「必竟戦役に従事したればこそ」「国家の為に戦役にて傷病を得し故にこそ」拝受することのできた「恩榮」なのである。

このような皇后による教育効果は、「貴婦人」たちにとどまるものではなかった。日清戦争時の新聞は、都下の「芸娼妓」たちが「綿繖糸」の製造に精を出していることを報じている。

豫て花井楼の花魁達が在韓第一野戦病院へ脱脂ガーゼ脱脂綿を献納したいとの殊勝心を起し（中略）十六娼にて脱脂ガーゼ十反脱脂綿三ポンドを献納いたしたしと一昨々日陸軍省へ願ひ出でしに即日許可されしとハ其心実に泥中の蓮と云ふべし

〔東廓便り〕『都新聞』一八九四・一〇・三

「芸娼妓」の女性たちもまた、「女性の国民化の理想的モデル」である皇后にならない、日本国民の「婦女子」なるべく、それを象徴する「綿繖糸」製造に関わろうとしたわけだ。では、彼女たちの「殊勝心」は、国家によって受け止められたのだろうか。

一八九五（明治二八）年五月三十日、東京市中は明治天皇の〈凱旋〉に熱狂していた。各新聞は、各団体や人々が「奉迎」準備にわき返るさまを連日報道していた。〈凱旋〉当日、「奉迎」ムードは最高潮に達し、「御還幸奉迎又ハ拝観の爲め当日まで近県より上京したる者と東京市下の奉迎者とを略算すれば少くも三十万人以上に及びたるならん」というほどの状況

であった。はじめての「大凱旋門」が日比谷に作られたのもこの折りである。

この熱狂ぶりを、樋口一葉もその日記に記している^⑬。もともと、一葉自身はこの〈凱旋〉を見に行くことはしなかった。自宅にいた彼女のもとに、まず午前十時頃、「高等女子師はん学校一同と共に奉迎ニ趣かんとする」安井てつが、野々宮菊子と落ち合うためにやって来た。しかし果たせず、てつはそのまま急ぎ出かける。「正午過より花火の音絶まな」いなか、午後三時過ぎに兄・虎之助が「芝区民奉迎の徽章」を胸にかけ、「いたくつかれしとおぼしくまるぶやうにして」やって来た。「酒の支度」などするうちに、これもまた「つかれて正体なきやう」になった野々宮菊子が訪れ、さらに姉ふじの長男・久保木秀太郎もやって来た。一葉は「このよハ早く寝たり」と記すばかりで、何の感想も書き留めてはいない^⑭。

安井てつは、一八九〇（明治二三）年に東京女子高等師範学校を卒業し、その後、教職につくべき義務年数とされた五年間を、母校の附属小学校で三年、さらに岩手師範学校附属小学校高等科の教員として二年過ごし、一八九四年、ふたたび東京に戻って東京師範学校附属小学校で教職にあった。一八九五年当時は、一葉の友人・野々宮菊子の仲介で一葉から古典文学を習っていた。女高師一の秀才と謳われたてつと、女性作家樋口一葉とのたまさかの邂逅であった。

この日、東京女高師では「天皇陛下大本営ヲ東京ニ移セラレ御還幸アラセラレニシ」に付き「賀表」を呈し、さらに午前八三十分、「藤棚下ニ職員生徒幼児ヲ悉ク集メ大元帥陛下奉迎ノ歌及ヒ君カ代ヲウタヒ校長ヨリ御還幸ニ就テ簡單ナル演述及ヒ賀表朗読アリ終リテ祝砲（瓦斯ノ爆声）廿一発ヲ放テ祝賀式ヲ挙^⑮」げた。その後、安井てつらは奉迎パレードに出かけたわけである。

しかし、人々の〈国民化〉にあたって絶好の教育の機会と思われるこの

〈凱旋〉イベントから排除された者たちがいた。皇后に学んだ「綿繖糸」製造に「殊勝心」を見せていた「芸娼妓」たちである。彼らも華やかな「奉迎」を企てていたが、「卑賤なる姿を現はしてハ却つて聖駕を汚す」⁴⁷として「其筋」から説論を受け、「素人風に粧」つて「内密に奉迎」することになった。⁴⁸「素人」でない女性とは〈国民〉の範疇からあらかじめ排除される。このことは、まさに「教育勅語」によって確立した日本における天皇制家族国家主義の一端を露呈している。

そして、彼女たち排除される女性たちとは対極の場所に位置したのが、美子皇后をジェンダー・モデルとし、次代の小国民の教育を自らの使命として国家への奉仕と自らのアイデンティティを確立した、東京女子高等師範学校の生徒たちだったのである。しかし、彼女たちのすべてが制度の要求する女性像、すなわち良妻賢母としてあったわけではない。安井てつがそうであったように、教育や学問に生涯をささげ、自らは單身者であった女性たちも少なくない。その意味では、東京女高師の女性たちは、私的領域においてはしばしば制度から逸脱し、一方公的領域において制度に寄与する、二重の存在状態を持っていたのである。

おわりに

「国家有用の人材」たらんとした東京女子高等師範学校生たちは、美子皇后を具体的モデルとし「教育勅語」を奉じながら、女子教育者として全国に散っていった。同校の同窓会である「桜蔭会は、1900年代から積極的な海外進出の姿勢を見せていた」⁴⁹が、その最大の赴任先は「朝鮮」であった。「皇民化」教育においては、日本人教師が朝鮮民衆の「皇民化」を担う立役者だったのであり、統治政策の中での日本人教員の重要性は大きい⁵⁰。かっ

のような教育を行ったのか、そのことが問われねばなるまい。それらを問う直すことではじめて、女性にとつての〈学問〉の真の意義が明らかになることだろう。侵略国と植民地と、絶対的な支配関係のなかで、女性たちの連帯は生まれようもなかったのだろうか。それとも、不可能性を抱え込みつつ、たまさか、国家的支配関係を無化するような女性たちの関係性が夢想される余地は残っていたのだろうか。

「教育勅語」に基づく良妻賢母主義教育を受けながら、しかし同校からは良妻賢母の枠を大きく逸脱した、すぐれた教育者・研究者が数多く輩出されたこともまた事実である。そこにはどのような葛藤があり、どのような闘いが重ねられてきたのだろうか。それらを追跡することで、女性にとって〈学問〉が真にもたらすものとは何か、考察を重ねていきたいと思う。

〔注〕

(1) 一九〇八年、奈良女子高等師範学校が設立されたことから、以後は東京女子高等師範学校と称する。

(2) 学生頒布に先立つ太政官指令の条項「一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムヘキ事」(一八七二)、また学制序文(被仰出書、一八七二)に「自今以後一般の人民(華士族農工商及婦女子)必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」とあるように、明治に入つて、初めて女性のための教育の道が開かれた。とは言え、女性の就学率は低く、中等教育以上を受ける女子は極めて少なかった。のちに日本女子大学校を開く成瀬仁蔵は、一八九七年、「本邦で女子に高等教育を授けて居るのは女子高等師範学校のみであります」(「女子教育談」『成瀬仁蔵著作集』一巻、日本女子大学校、一九七四、一六

一頁」と述べている。

- (3) 正確には、「女学生」とは、明治期における学校教育成立のなかで、女性のための中等教育機関として設立された「女学校」に通う女生徒たちを言う。一般に、女子師範学校の生徒は「師範生」と呼ばれ「女学生」とは称されないが、本稿では便宜上、「女学生」の語で統一した。なお、東京女子高等師範学校附属女学校の生徒たちは「女学生」と呼ばれていた。

- (4) 『女学生の系譜―彩色の明治』七六―七八頁。

- (5) 拙稿「彼女たちの受難―表象としての女の学問」(『ジェンダー研究』四号、二〇〇一・三、六五―七七頁)を参照されたい。

- (6) 水原克敏『近代日本教員養成史研究―教育者精神主義の確立過程―』(風間書房、一九九八)は、「教育勅語」によって教員が「臣民をして君主の徳に同化せしめる役割を本質的使命として担わされ」ることになったと指摘している。よって、以後の「教育者精神」は「教育勅語」の肇国の原理に連結し、「天皇制との関係における教員のあり方がようやく確定された」。(同書、八〇五―八〇六頁)

- (7) クララ・ホイットニー著・一又民子訳『クララの明治日記(上)』講談社、一九七六、一七三頁。

- (8) 東京女子高等師範学校『東京女子高等師範学校六十年史』一九三四、一三二頁。

- (9) 奥田環「東京女子高等師範学校の『学校博物館』」『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』七号、二〇〇二、二三頁。

- (10) 注7に同じ。

- (11) 若桑みどり氏は、「おそらく皇后が後宮以外の、国家・国民向けの事業を開始したのは、明治八年の女子師範学校設立援助からである」と指摘している(『皇后の肖像』筑摩書房、二〇〇一、二五六頁)。

- (12) 同上、二三頁。

- (13) たとえば森有礼は、一八八七年十一月十五日、和歌山県尋常師範学校で行った演説で「女子教育ハ国民教育ノ根本ニシテ随テ国家隆衰ノ係ル所」と述べている(『教育時論』六〇号、一八八八・一・二二)。

- (14) 作譜は式部寮雅楽課二等伶人東儀季熙。

- (15) 片野真佐子『皇后の近代』講談社選書メチエ、二〇〇三、五頁。

- (16) 若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、二〇〇一、一三頁。

- (17) 『東京女子高等師範学校六十年史』六九頁。

- (18) 「養蚕ニ関スル講話」『東京茗溪会雑誌』一一四号、一八九二・七・二〇、二二―二三頁。

- (19) 注17に同じ。

- (20) 養蚕の実習は、各都道府県的女子師範学校においても行われたようである。「女子師範学校の養蚕」(『教育時論』三七〇号、一八九五・七・二五、三四頁)では、福島県尋常師範学校女子部の事例が紹介されている。

- (21) 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』お茶の水女子大学、一九八四、六八頁。

- (22) 『東京女子高等師範学校六十年史』六四頁。

- (23) 「謝辞」『東京茗溪会雑誌』一九号、一八八四・八・二〇、五八―五九頁。

- (24) 「女子高等師範学科卒業生総代佐々木あさ謝辞」『東京茗溪会雑誌』九九号、一八九一・四・二〇、二八頁。

- (25) 「女子高等師範学科卒業生総代茂木ちゑの謝辞」『東京茗溪会雑誌』一一一号、一八九二・四・二〇、二三頁。

- (26) 「女子高等師範学科卒業生総代加藤くに謝辞」『東京茗溪会雑誌』一二三号、一八九三・四・二〇、三九頁。

- (27) 附属高等女学校卒業生の謝辞も同様である。
- (28) 『東京女子高等師範学校六十年史』三四八頁。
- (29) 「皇后陛下の御誕辰」『女鑑』八七号、一八九五・六・五、七九頁。
- (30) 「女子高等師範学校彙報」『東京茗溪会雑誌』一二五号、一八九三・六・二〇、一一頁。
- (31) 「女子高等師範学校彙報」『東京茗溪会雑誌』一三七号、一八九四・六・二〇、一三頁。
- (32) 十文字こと先生伝刊行会『十文字こと先生伝』十文字学園、一九六一、三七頁。
- (33) ちなみに、十文字ことは、同年五月二十八日の日記に、美子皇后の誕生日を祝う東京女高師の様子を詳しく記述している。「御ざえいとさかしくおはしまし、万かねさせられ、たれしも感じあへることなり。かゝる母君をいただき、この太平の御代にあへるも、皆その御徳によりてなり」という彼女の言葉は、おそらく、当時の女高師生たちに共有されていた皇后への思いであろう（『十文字こと先生伝』五三頁）。
- (34) さらに、日露戦時には、厭戦をあらわにした明治天皇に対し、美子皇后の夢枕に坂本龍馬がたつたという話がメディアを通じて全国を駆け巡り、国民の戦意を昂揚させた。ここでは戦いの女神の役割をも果たしている。
- (35) 若桑みどり『皇后の肖像』二五七頁。
- (36) 片野真佐子『皇后の近代』七六頁。
- (37) 「雑報」『女鑑』七三三、一八九四・一〇・三〇、七八頁。
- (38) 「彼の深閨の女子に望む」(『都新聞』一八九四・七・二六)には、「此に於て余輩ハ先づ彼の深閨の婦女子に望む、其閑日月を利用し、其閑手腕を活用して、我が軍需品の第一たる綿織糸の類を製し、以て恤兵の資に供せよ、明治十年の役我至仁至慈なる皇后陛下にハ、自ら
- 手玉を下して此の急需品を調製せられたりと、我日本の婦女子たるもの我が後の御奨励を待たず進んで此等為し易きの事に力を用ひざるべからず豈綿織糸のみならんや、苟くも恤兵の資に供し得べきものハ、之が製造に工夫せよ」とある。
- (39) 「雑報」『女鑑』七一、一八九四・九・二六。
- (40) 「婦人の表誠」『女鑑』七〇号、一八九四・九・一〇、八〇頁。
- (41) 「女子高等師範学校有志者の義挙」『教育時論』三四六号、一八九四・一一・二五、三三頁。
- (42) 「雑報皇后陛下行啓の記事」『女鑑』八九号、一八九五・七・五、六四―七一頁。
- (43) 一葉の日記「水の上」(一八九五・五・三〇)には以下のように当日の様子が記録されている。
- 風少しそひて空ハはれたり主上東都に還幸即ち凱旋の当日なれば戸々国旗を出し軒提灯など場末の賤がふせやまでいたりてうらや住居するものは手遊やにうる五厘国旗など軒にさしたるもミゆ着輩ハ午後二時成りといふ
- (『樋口一葉全集第三卷(上)』筑摩書房、一九八一、四三七頁)
- (44) 注43に同じ。また翌三十一日の日記には「空くもれり今日ハさきさきの宮の還幸あるへき日なれはいかて雨ふらさらんやうにといひる」(同上、四三八頁)と記している。なお、これら日清戦争と樋口一葉については、拙稿「女性作家」と「国民」の交差するところ―一葉日記を読む―(『お茶の水女子大学人文科学紀要』五六卷、二〇〇三・三、一五―二五頁)ならびに「日清戦争という〈表象〉―一葉・鏡花のまなざしをめぐって」(『敍説Ⅱ』〇八号、二〇〇四・八、一二六―一三七頁)を参照されたい。
- (45) 安井てつ(一八七〇―一八四五)は、日本の女子教育家を代表する

人物。東京女子高等師範学校卒業後、ケンブリッジ大学に留学し、帰国後は母校の教授等を経て、一九一八年の東京女子大学の創立に尽力し、第二代学長となった。

- (46) 「女子高等師範学校彙報」『東京茗溪会雑誌』一四九号、一八九五・六・二〇、三九―四〇頁。

- (47) 「奉迎者」『読売新聞』一八九五・五・三一。

- (48) 「芸妓の奉迎ハ内密」『万朝報』一八九五・五・三一。

- (49) 稲場継雄「東京女子高等師範学校と旧韓国」朝鮮の教育」『国際教育文化研究』一号、二〇〇一・三、一一―一四頁。

- (50) 咲本和子「『皇民化』政策期の在朝日本人―京城女子師範学校を中心に―」『国際関係学研究』二五号、一九九八、七九―九四頁。

*本稿は、国際シンポジウム「文化表象の政治学―日韓女性史の再解釈」

(お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」プロジェクトD、梨花女子大学アジア女性学研究センター共催、二〇〇七年八月二十九・三十日、於・お茶の水女子大学)における口頭発表を基としたものである。当日、会場から有意義な議論・質疑をいただいた。感謝申し上げます。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(課題番号一九五二〇一四〇)の助成を受けたものである。